

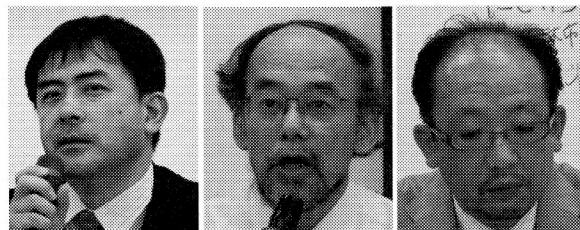
# つながるひろがるフェミ・ジャーナル ふえみん

- 23..... 特集 沖縄・普天間基地
- 4..... 性同一性障害の子どもへの支援
- 4..... NHK「女性のためのアーカイブス」が開設
- 5..... 新連載 目からウロコの排泄ケア
- 6..... film『クリスマス・ストーリー』

## 性同一性障害の子どもへの支援

多様な性や生き方を認める社会へ

文 ● 野坂祐子



(左から) 中塚幹也さん、塚田攻さん、康純さん

では社会に出ていく際に受け入れてもらえない不安などが関連している指摘。学校は、①GIDの子ども自身の支援、②在校生全体が多様な性への理解を深めるための教育、③保護者へのGIDに関する情報提供、の3つの役割を果たすべきという。中塚さんは「性別適合手術などにより性を変えることですべてが解決するのではない」と、社会が多様な性を理解し受け入れることが重要であると強調した。

### 周囲からの受け入れ

埼玉県・かわごえクリニックの精神科医である塚田攻さんは、発達心理の観点からGIDの子どもの特徴や課題を話した。

思春期の問題として多いのがいじめの問題。グループからの逸脱や言葉による暴力を受けることが多い。また二次性徴への嫌悪感や違和感、恋愛やからだのことも分かち合えないことも心理的な負担になっている。青年期に入ると、服装や性指向を身体的性別に合わせようとしてみたり、無理な性行動をとったりしながら、GIDであると確信していく人もいる。

安定した成長が得られる」と塚田さんは話した。

### 性のグラデーション

大阪医科大学ジェンダークリニックの康純さんは、GIDを訴える児童・生徒の対応をしてきた経験から症例を報告した。過去10年間の受診者数は1190人で、近年は20代の人の割合が高いという。

身体的性別や戸籍を変更しても社会生活がうまく送れない人もいるので、性別変更手術からのサポートが必要であることを強調。手術に慎重な意見もある一方で、慎重になることで国内での手術の敷居が高くなり、本人が自己判断で進めざるをえなくなる問題も生じている現状を指摘した。手術の可否の問題ではなく、「治療や手術をどういうふうに住き方に反映していくのかを聴くことが大切」と康さん。本人へのサポートと同時に、「社会が性のグラデーションを認めることが求められている」と語った。

2006年、性同一性障害(GID)と診断された兵庫県の小学生について教育委員会が保護者側の意向を受け入れ、本人が自認する性別で学校生活を認められたと報道された。学校生活には、男女別の制服や更衣室、トイレなど、性別違和をもつ児童・生徒にとっては悩みが多く、そのことが不登校などの一因になっているとの指摘がある。

岡山大学病院・ジェンダークリニックでGIDの治療に携わる中塚幹也さんは、GIDについて「異性の体に閉じ込められた状態」と説明。同クリニックでは、性別違和に悩む人の相談や治療を行っている。同クリニックでGIDと診断された661人のデータでは、性別違和は中学生までに9割が自覚しており、4分の1が不登校を経験、7割が自殺念慮をもっていたという結果が示された。自殺念慮の背景には、思春期では二次性徴の始まりや制服の着用、恋愛やいじめの問題があり、青年期

では社会に出ていく際に受け入れてもらえない不安などが関連している指摘。学校は、①GIDの子ども自身の支援、②在校生全体が多様な性への理解を深めるための教育、③保護者へのGIDに関する情報提供、の3つの役割を果たすべきという。中塚さんは「性別適合手術などにより性を変えることですべてが解決するのではない」と、社会が多様な性を理解し受け入れることが重要であると強調した。

会場には、学校関係者や医療従事者、支援者など様々な立場の人の参加があり、GIDの支援に対する関心の高さが感じられた。GIDの児童・生徒が直面している困難さは、性やジェンダーに関する社会の価値観や態度によるところが大き。多様な性や生き方を認める社会のありようは、GIDに限らず様々な個性や課題を抱えた児童・生徒の理解や支援にもつながるだろう。